

東山道武蔵路発掘調査概報

Ⅱ

－ 保存管理計画に基づく学術調査 －

2016年3月

国分寺市教育委員会
国分寺市遺跡調査会

序

国分寺市教育委員会は、史跡武蔵国分寺跡と周辺地域の豊かな自然・歴史的環境を未来へ継承するために、適切な保存・管理のための基本方針や、史跡の現状変更への対応、追加指定された東山道武蔵路跡の保存管理計画への追加、そして史跡を構成する諸要素の見直しなどを図るため、平成24年4月に「国指定史跡武蔵国分寺跡 附東山道武蔵路跡保存管理計画（第2次）」を策定しました。保存管理計画では、武蔵国分寺関連遺跡では必要に応じて学術調査を実施し、調査の結果、往時の武蔵国分寺の構成・性格を考えるうえで、学術的に極めて重要な発見があった場合には遺構の保存、史跡の追加指定等を検討することとしています。

本書は、このような目的で実施した東山道武蔵路の学術調査を報告するものです。国分寺崖線下で検出された東山道武蔵路は、平地でみられるような両側に側溝を有するものではなく、路面中央が浅く窪み、その上面が硬化している構造のものでした。また、硬く縮まった石敷き面が2層確認され、武蔵国分寺がこの地に創建された後の古代道路のあり方や、僧尼寺中間地点の遺構の重要性を考える上で貴重な情報を得ることができました。

本書を報告するにあたり、多大な御理解・御協力をいただきました地権者様をはじめ、発掘調査から報告書刊行に至るまで御協力をいただきました関係諸機関の皆様方、御指導を賜りました各位に厚く御礼申し上げます。

平成28年3月

国分寺市教育委員会

例 言

1. 本書は、東京都国分寺市西元町二丁目 1658-3 において、国分寺崖線下における東山道武蔵路の位置・構造等を確認するために実施した武蔵国分寺跡第 704 次の埋蔵文化財発掘調査報告書である。発掘調査から報告書作成作業にかかる経費は、国分寺市（国分寺市教育委員会）が負担した。
2. 発掘調査・整理作業は、国分寺市教育委員会が調査主体となり、国分寺市遺跡調査会（会長：坂浩秀一）に委託して実施した。
3. 現場作業は、平成 27 年 1 月 26 日から同年 2 月 27 日まで行った。報告書作成のための整理作業・報告書作成は平成 27 年度に行い、平成 28 年 3 月 31 日の刊行とした。
4. 発掘調査は、国分寺市教育委員会教育部ふるさと文化財課史跡係の増井有真が担当した。
5. 本書の編集・執筆は、坂浩秀一調査団長の指導のもと増井有真が行った。なお、第 3 章は調査成果をもとに坂浩秀一と増井が協議して執筆した。
6. 本書の挿図・表等の作成には Microsoft®Word®・Excel®、Adobe®Illustrator®・Photoshop®・Indesign®の各ソフトを用いた。
7. 調査における図面は、全体図 1/100・遺構平面図 1/20・断面図 1/20 で記録している。写真は 35 mmフィルムとデジタルカメラを併用して撮影している。
8. 遺物や各種図面・写真類は、一括して国分寺市教育委員会で保管している。
9. 発掘調査から報告書作成までの作業に従事した者は下記の通りである（五十音順・敬称略、上記職員を除く）。

【ふるさと文化財課史跡係】 上敷領久・島田智博・中野 純・中元幸二・依田亮一

【国分寺市遺跡調査会】 井口正利・岩田尋湖・佐藤 令・富澤 好・平塚恵介

【国分寺市ふるさと文化財愛護ボランティア】 梅山伸二・上村雄三・佐々木義身

10. 発掘調査から報告書の作成に至るまで、下記の諸氏・関係機関から御指導・御協力を賜りました。記して感謝申し上げます（順不同・敬称略）。

荒井健治・有吉重蔵・江口 桂・合田恵美子・小柳とふ・塚原二郎・西野善勝・野口 淳・野田憲一郎・広瀬和雄・藤野一之・松原典明・湯瀬慎彦

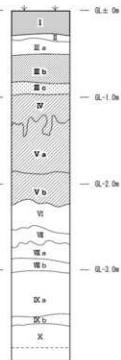
文化庁記念物課・東京都教育庁地域教育支援部管理課埋蔵文化財係・国分寺市文化財保護審議会・国分寺市史跡武蔵国分寺跡保存整備委員会・国分寺市遺跡調査会調査研究指導委員会

凡例

① 国分寺市の基本土層について

国分寺市域で用いる層位区分は、表土（Ⅰ層）下の黒褐色土を黒色味が強い上層（Ⅱ層）と、ローム層への漸移層である下層（Ⅲ層）に細分している。そのため、黒色土をⅡ層、Ⅲ層以下をローム層にあてて、一般的な武蔵野台地上の遺跡における層序区分とは呼称が若干異なっている。本書で報告する調査対象地は、武蔵野段丘面と立川段丘面とに存在するが、堆積土層は下記のとおりは共通した層序区分を示す。

- I 層 表土。近へ現代の盛土、および耕作土。層厚約 30 ～ 50 cm。
- II 層 黒褐色土。粒子が粗い。締まりはやや弱い。粘性は弱い。古代へ中世の遺物を包含し、古代の遺構覆土に似る。層厚約 10 ～ 15 cm だが、市内では削平されていることが多い。
- III a 層 黒褐色土。粒子はやや粗い。粘性はやや弱い。層厚約 10 ～ 15 cm。同層上面が本来的な古代の遺構確認面であるが、II 層と類似した土質であることから、この下層において遺構を視覚的に検出することが多い。
- III b 層 暗褐色土。III a 層より明るく、褐色味が強くなる。軟質で粘性はやや弱いが、III c 層に近づくに連れて粘性が強くなる。縄文時代中期の遺物を包含する。層厚約 30 ～ 40 cm。
- III c 層 茶褐色土・暗黄褐色土。縄文時代早へ前期の遺物を包含する。ローム層への漸移層で、赤色スコリアを多量に含む。層厚約 10 ～ 15 cm。
- IV 層 黄褐色土。ソフトローム。V 層との境は凹凸が激しい。層厚約 15 ～ 25 cm。
- V a 層 黄褐色土。ハードローム。色調によって a・b の 2 層に分けられる。下層にいくに従い黄色味が薄くなり反褐色味を帯びてくる。その色調は漸移的に変化する。赤色・黒色スコリアを多量に含む。部分的に V b 層と中間の色調を有する部分がある。
- V b 層 暗灰褐色土。ハードローム。色調は V a と VI 層の中間。
- VI 層 暗褐色土。立川ローム第一黒色帯。スコリアは細かく、全体に粒子緻密。やや粘性を増す。
- VII 層 黄褐色土。黄色味が強く、明るい。VIII 層へは漸移的に移行し、境界はやや不明瞭。削るとジャリジャリする（A T 層）。
- VIII a 層 褐色土。立川ローム第二黒色帯。VII 層下部に似て、やや暗くなり始めるところから本層とし、削るとジャリジャリする。黒色・赤色スコリアを含む。
- VIII b 層 暗褐色土。立川ローム第二黒色帯。VIII a よりさらに色調が暗くなる。粒子が細かく、緻密で粘性がある。黒色・赤色・青色・白色スコリアを多く含む。
- IX a 層 暗褐色土。立川ローム第二黒色帯。VIII b よりさらに黒色味増。粒子は細かく、緻密で粘性が強くなる。
- IX b 層 暗褐色土。立川ローム第二黒色帯。成分は IX a 層と同じで、粒子は細かく、緻密で粘性が強い。下部の 5 ～ 10 cm は X 層の影響から IX a 層より明るい部分もある。
- X 層 黄褐色土。粒子極めて細かく、緻密で粘性のあるローム土。

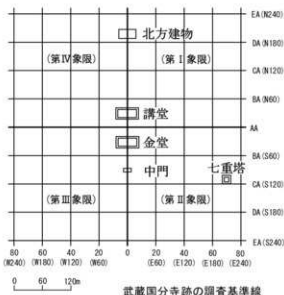


国分寺市内の平均的な層序

② 調査地区の位置について（グリッド）

国分寺市では、No.10・19 遺跡である武蔵国分寺跡（僧尼寺）の広大な範囲を統一して調査するため、局地座標系を用いている。

座標原点は僧寺伽藍中軸線を基準に、金堂中心の北 26.276 m の中軸線上の点（コンクリート埋設）である。僧寺中軸線は、真北から 7° 07' 01"、磁北から 0° 37' 01" それぞれ西偏する。この座標原点を中心に象限を I ～ IV に大別し、中心点からの距離を N・S・E・W で表す。さらに、本文中および図面のグリッド表示の数字は、南と西に接する基準線に与えた記号の組み合わせにより呼称する。東西基準線はアルファベット 2 文字で表す。1 文字目は原点を A とし、60 m ごとに B・C・D… とふり、2 文字目はその内を 3 m ごとに 20 区に分け A ～ T とふっている。南北基準線は数字で表し、原点を O として以下東西と



もに3mごとに1・2・3…とふった。なお、遺跡記号はMK(武蔵国分寺の略)にI~IVの各象限を続けたものに、調査次数を付して表示している。

③ 遺構図面について

調査地点位置図・遺構図面は、図面上が座標北を示す。特記のない限り調査地点位置図は縮尺を1/2,500、土層断面図および柱状図の縮尺は1/40に統一し、スケールバーで示している。遺構断面図表示の数字は水糸レベルで海拔高を示す。ただし、一部原図に示されていないものは空欄とした。

④ 全体図・遺構図の表現方法について

図中の記号・ライン、スクリーントーンについては次の通りで、これ以外に使用しているトーンは個々の図で示している。なお、図の一部ではスクリーントーンを使用していないものもある。



⑤ 遺構番号について

遺構は遺跡ごとにほぼ発見順に連続番号を付し、下記の遺構記号を冠して表示している。また、縄文時代の遺構は遺構番号末尾にJを付し、Pは遺構記号の後ろにJを付して歴史時代の遺構と区別している。

SD:溝 SK:土坑 SF:道路 SX:特殊遺構・性格不明遺構 P:小穴

⑥ 遺構写真について

各写真キャプションに併記する(方位)は撮影した方向を示す。真上から撮影した場合は上下左右と方向を用いて方向を示している。

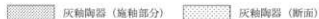
⑦ 遺物番号について

遺物は、各調査において種別毎に連続番号を付し、下記の遺物記号を冠して表示する。

【歴史時代】	土器類	PK:須恵器	PN:灰軸陶器	PQ:青磁・白磁	
	瓦 埴 類	KA:鏡瓦	KC:男瓦	KD:女瓦	
	陶 製 品	CA:陶硯			
	金属製品	MM:釘鉄製品	MY:鉄滓		
【縄文時代】	土器類	JE:中期前半	JF:中期後半	JG:後期	JJ:時期不明
	石器類	AO:石鏃			

⑧ 遺物の表現方法について

遺物のスクリーントーンの指示は次のとおりである。



⑨ 遺物の縮尺について

縮尺は次のとおり統一し、スケールバーで示している。また、写真図版についても、おおむね次のスケールに統一している。

土器類:1/3 瓦類:1/4 金属製品:1/2 縄文時代石器:1/3

⑩ 遺物観察表について

遺物の記述については一覧表とし、原則として図面番号順に列記してある。遺物観察表における法量のうち、充存しているものは括弧なしで全長数値を表し、()は残存数値、(())は復元数値を表す。「-」は計測できないものを表す。

国分寺市遺跡調査会構成員名簿

平成 28 年 2 月 1 日現在

役員および監事

会 長	坂誥秀一	国分寺市文化財保護審議会会長
副 会 長	星野亮雅	国分寺市文化財保護審議会副会長
理 事	井澤邦夫	国分寺市長
理 事	富山謙一	国分寺市教育委員会委員長
理 事	松井敏夫	国分寺市教育委員会教育長
理 事	北原 進	国分寺市文化財保護審議会委員
理 事	遠藤慈郎	国分寺市文化財保護審議会委員
理 事	福嶋 司	国分寺市文化財保護審議会委員
理 事	波田健二	東京都教育庁地域教育支援部管理課長
専務理事	木橋信行	国分寺市教育委員会教育部長
監 事	峯岸桂一	元国分寺市社会教育委員
監 事	伊藤敏行	東京都教育庁地域教育支援部管理課統括課長代理

武蔵国分寺跡調査・研究指導委員会

委 員 長	坂誥秀一	(考 古 学) 立正大学名誉教授
委 員	藤井恵介	(建 築 史) 東京大学大学院工学系研究科教授
委 員	佐藤 信	(古 代 史) 東京大学大学院人文社会系研究科教授
委 員	酒井清治	(考 古 学) 駒澤大学文学部教授
委 員	松井敏也	(保存科学) 筑波大学人間総合科学研究科准教授

事務局

事務局長	島崎進一	国分寺市教育委員会教育部ふるさと文化財課長
事務局員	松本 徹	国分寺市教育委員会教育部ふるさと文化財課文化財保護係長
事務局員	吉田澄音	国分寺市教育委員会教育部ふるさと文化財課文化財保護係嘱託
事務局員	熊木正好	国分寺市遺跡調査会

調査団

団 長	坂誥秀一	立正大学名誉教授
主任調査員	依田亮一	国分寺市教育委員会教育部ふるさと文化財課史跡係長
調 査 員	増井有真	国分寺市教育委員会教育部ふるさと文化財課史跡係
調 査 員	中道 誠	国分寺市教育委員会教育部ふるさと文化財課文化財保護係
調 査 員	中元幸二	国分寺市教育委員会教育部ふるさと文化財課史跡係嘱託
調 査 員	島田智博	国分寺市教育委員会教育部ふるさと文化財課史跡係嘱託

本文目次

序	2
例言	3
凡例	4
国分寺市遺跡調査会構成員名簿	6
本文目次 挿図目次 表目次 図版目次	7
第1章 調査の概要	8
1. 調査に至る経緯と経過	8
2. 調査地区の位置と環境	9
第2章 検出された遺構と出土遺物	12
1. 歴史時代の遺構と遺物	12
2. 縄文時代の遺構と遺物	23
第3章 結語	26
引用・参考文献	29
報告書抄録 奥付	

挿図目次

第1図 国分寺市の地理的環境と湧水のしくみ	9
第2図 遺跡の位置	10
第3図 MKIV-704 調査区全体図	12
第4図 Aトレンチ 東壁土層断面図	15
第5図 Bトレンチ土層断面図	16
第6図 Bトレンチ土層断面合成写真(南から)	16
第7図 Bトレンチ西端 土・礫堆積状況(東から)	16
第8図 Bトレンチ B8層検出状況(南から)	16

第9図 Bトレンチ東端 P-1～8平面図・断面図	16
第10図 P-1～8検出状況(上が北)	16
第11図 P-1土層断面(西から)	16
第12図 出土遺物実測図(歴史時代) 1	18
第13図 出土遺物写真(歴史時代) 1	19
第14図 出土遺物実測図(歴史時代) 2	20
第15図 出土遺物写真(歴史時代) 2	21
第16図 SX354J 平面図	23
第17図 出土遺物実測図(縄文時代)	24
第18図 出土遺物写真(縄文時代)	24
第19図 周辺の調査区と東山道武蔵路の推定通過ライン	27
第20図 武蔵国分寺跡第503次調査 東山道武蔵路平面図・断面図	28
第21図 昭和28年(上)と昭和35年(下)測量地形図の開析谷と東山道武蔵路推定通過ライン	28

表目次

第1表 周辺の調査地区一覧(東山道武蔵路)	11
第2表 歴史時代遺物観察表	22
第3表 縄文時代遺物観察表	25

図版目次

図版1 A・Bトレンチ	30
図版2 Bトレンチ	31

第1章 調査の概要

1. 調査に至る経緯と経過

経緯 国分寺市教育委員会では、平成元年3月に国指定史跡武蔵国分寺跡保存管理計画を策定し、現状変更の取り扱い、公有化事業、環境整備、維持管理等を実施してきた。そして、平成24年4月に国指定史跡武蔵国分寺跡 附東山道武蔵路跡保存管理計画（第2次）（国分寺市教育委員会2012、以下、保存管理計画（第2次））を策定し、史跡をめぐる現状の変化への対応、国史跡武蔵国分寺跡〔僧寺地区〕新整備基本計画などの諸計画との整合性、追加指定された東山道武蔵路跡の保存管理計画への追加、さらに史跡を構成する諸要素の見直しなどを図った。この中で、武蔵国分寺に関連する建物群等が含まれる可能性が高い周知の埋蔵文化財包蔵地（武蔵国分寺跡（No.10・19））においては、必要に応じて学術調査を実施することが示されており、調査の結果、往時の武蔵国分寺の構成・性格を考えるうえで、学術的に極めて重要な発見があった場合には、遺構の保存、史跡の追加指定等を検討することとしている。

このような保存管理計画（第2次）を踏まえ、国分寺市教育委員会は、平成26年2月に、西元町二丁目において古代の官道である東山道武蔵路の位置や構造を把握するための学術調査（武蔵国分寺跡第699次調査、以下MK〇次）を実施した。調査の結果、通常より幅の広い東西側溝（SD427・428）が検出され、さらに側溝内や路面部分の一部が厚い硬質層で埋められているなど、他の調査区で検出されている道路構造とは性格を異にすることが確認された。このため国分寺市教育委員会は、周辺地点の東山道武蔵路の道路構造をさらに検証するため、平成26年6月に追加調査を実施することを決定した。調査は、東山道武蔵路の推定ラインの検証、側溝の有無、礫敷き範囲の北限、湧水に対応した土木工事の痕跡の有無等を確認するため、国分寺崖線直下の麓において実施する計画を立て、平成26年9月に地権者との調整を開始した。現状が畑地であるため、耕作に影響の無い期間等を確認し、平成27年1月22日付国教教ふ取第776号の承諾書をもって調査の了解を得た。

経過 調査は、東山道武蔵路の構造を確認するため、調査区の北側に南北約8mのAトレンチと、南側に東西約16mのBトレンチを設定し、平成27年1月26日から調査を開始した。重機による表土掘削を開始すると、Bトレンチの西側で、表土下約20cmの深さで石敷きを検出されたため、重機掘削は同一レベルまでとし、これ以下は手掘りで確認を行った。Aトレンチは、Bトレンチに比べて表土が厚く堆積していたことから、遺構確認面を探りながら重機で掘削した。地表面より約50cm下で締めりのある層に達したので、手掘りに切り替えて調査を行った。

Bトレンチでは、礫敷き（SX355）の検出状況の記録をとったのちに、トレンチの北半分を更に掘り下げた。その後、下層の礫敷き（SX356）と東山道武蔵路（SF1）の構築面と想定される面が検出されたため図面や写真の記録を行った。さらに地山を確認するために掘り下げると、SK3449、SD429、SK3540Jが検出されたため、同時に掘り進めた。その後、Bトレンチ内の西側の地山で礫層に類似した層が検出されたため、数箇所部分的な掘り下げを行い、自然堆積状況を確認した。

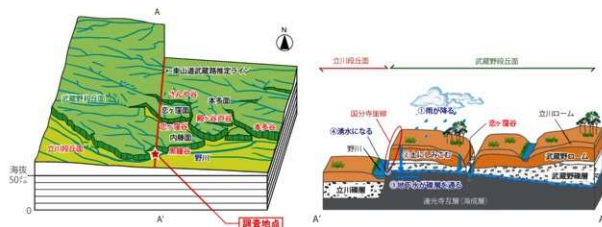
Aトレンチは、やや締めりのある層の一部を掘り下げるとBトレンチで検出されたSX356の延長が

検出されたため、範囲を記録した後の一部を掘り下げた。下層からはBトレンチと同様にSX355とSF1の一部が検出されたため、同一構造であることを確認し、必要な図面と写真の記録を行った。その間、2月24日には平成26年度第4回国分寺市史跡武蔵国分寺跡保存整備委員会において調査現場の視察を行っている。3月9日に人力での埋戻しを終え、同12日に耕運機で畑地の原状復帰を行って現地調査を終了した。基礎整理作業、報告書刊行のための作業は、平成27年度中に実施し、報告書は平成28年3月の刊行とした。

2. 調査地区の位置と環境

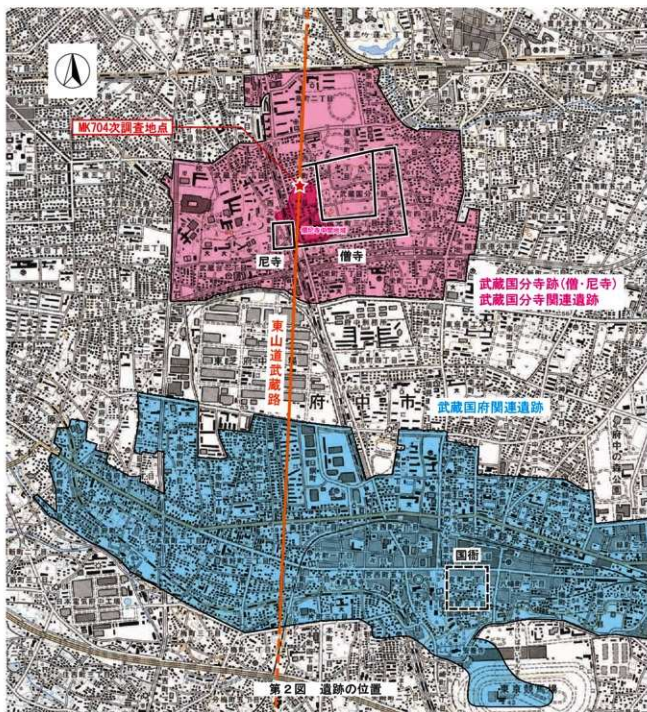
地理的環境 国分寺市域の地形は、大別すると比高差が最大20mにおよぶ国分寺崖線を境に南北に分けられる。国分寺崖線は洪積台地である武蔵野台地を古多摩川が10万年以上の歳月をかけて削り取って形成された河岸段丘の連なりを指し、通称「ハケ」と呼ばれている。国分寺崖線の崖上の高位は武蔵野段丘と呼ばれ、層位は地表から表土（黒色土）、立川ローム、武蔵野ローム、武蔵野礫層、そして海成層の連光寺互層の順に堆積する（第1図）。一方、崖線下の低位である立川段丘は、約4～5万年前に形成されたと考えられており、層位は表土、立川ローム、立川礫層、連光寺互層の順となっている（市内の基本層序は凡例を参照）。国分寺崖線の麓には、武蔵野段丘に浸みこんだ雨などが地下を流れ、地表に湧き出している場所がいくつかあり、これらの湧水は市内を東流する野川の源流となっている。この付近の国分寺崖線直下には黒鐘公園を源とする野川の支谷（黒鐘谷）の低地部分が幅約50mで形成されており、南側の立川段丘面とは1～2m前後、武蔵野段丘面とは12mの比高差がある。

本調査地区は、立川段丘面上に位置するが、武蔵野段丘面まで開析された谷の降り口付近でもある。国分寺市西元町二丁目1658-3に所在し、場所はJR西国分寺駅から南南東へ約800m、府中街道より東へ約100mに位置する。調査地区のすぐ北側では、数十年前まで湧水が確認されており、その流れはかつて黒鐘からの水と合わさって東方流れ、お鷹の道沿いを流れる元町用水に合流していたという。現在この湧水地点は埋没しているが、崖線直下の地表下約1mほどでは水が染み出ている状況が確認できる。なお、国分寺崖線を通過する東山道武蔵路のルート設定については、急峻な崖線を避け、開析谷の緩斜面を利用した可能性が指摘（福田2000）されている。



第1図 国分寺市の地理的環境と湧水のしくみ

歴史的環境 国分寺市内には、湧水をはじめとする豊かな自然環境のもと、約3万5千年前から人が生活した痕跡があり、市内には散布地（包蔵地）を含めると30を超える旧石器・縄文時代の周知の埋蔵文化財包蔵地がある。本調査地区は国分寺市を代表する縄文時代の遺跡として知られる多喜窪遺跡（遺跡No.11）、そして古代の武蔵国分寺跡（遺跡No.10・19）に該当する。多喜窪遺跡は縄文時代中期を中心とした集落跡で、国の重要文化財に指定された「武蔵多喜窪遺跡第一号住居跡出土品一括」が出土している。その後、弥生時代・古墳時代における集落は今のところ認められず、8世紀中葉以降、武蔵国分寺とその関連する遺跡が現在の西元町一～四丁目を中心に東西約2km・南北約1.5kmの範囲に展開するまでは、活発的な生活痕跡はほとんど見られない。ただし、7世紀中頃には、東山道武蔵路が国分寺市



域を南北に通過しており、この道路の存在が武蔵国分寺の好所条件の一つであったとも想定されている。武蔵国分寺は、東山道武蔵路を挟んで、東に僧寺、西に尼寺が配置され、僧尼寺ともに伽藍の主要部分は立川段丘上にあるが、僧寺寺域を区画する溝は武蔵野段丘面まで伸びている。武蔵国分寺に関連する遺跡からは、古代に続く中世の遺構や遺物も確認されており、また東山道武蔵路とほぼ並走する伝鎌倉街道の存在からも中世における人々の痕跡を僅かにたどることができる。

東山道武蔵路は、都と地方を結ぶ古代東山道の支路で、上野国から武蔵国府へと南下する幅約 12 m の直線道路である。『続日本紀』宝亀二(771)年十月巳卯条には、上野国邑栗郡から武蔵国に至る間に 5 つの駅が存在すると記載されており、駅家の候補地が数箇所挙げられている。この古代道路を現在では「東山道武蔵路」と呼称しており、これまでの発掘調査によって国分寺市域を通過していたことが明らかとなっている。その推定路線は、北は小平市上水本町地区より市内へ入り、戸倉一丁目、東恋ヶ窪六・四・三丁目、西恋ヶ窪一丁目、泉町二丁目、西元町二丁目の各地区を縦貫し、南は府中市武蔵台地区へと抜け、市域での総延長は約 3 km にも及ぶ。特に武蔵国分寺の寺院地の北方にあたる現在の泉町二丁目(泉町地区)では、平成 5 年から断続的に行われた大規模な発掘調査により、およそ 4 時期にわたる変遷が明らかにされている。

周辺の調査区 本調査地区から北へ約 15 m 地点の斜面地で実施された調査(MK79 次)では、側溝や硬化面は検出されなかったが、推定東側溝寄りの位置で主に男瓦を南北方向に組んで並べられた SX40 が確認されている。なお、瓦組遺構の下面に掘り込み等は確認されていない。瓦組は調査区外へ延長することから目印や境界を示す何らかの区画である可能性もある(第 19 図参照)。

本調査区の南へ約 15 m の位置で実施された下水道工事に伴う調査(MK37 次)では、石敷き面(SX28)とその下の硬化面と掘り込み部分(SX29)からなる遺構が検出されている。SX28 は、礫と瓦の破片で構築されており、幅は東西約 6 m である。下層の SX29 の硬質面は西側側溝推進通過ラインあたりから東へ 15 m 以上続いて検出され、さらに調査区外へ延長している。なお、SX の下部からは東山道の側溝にあたる溝は東西ともに検出されていない。

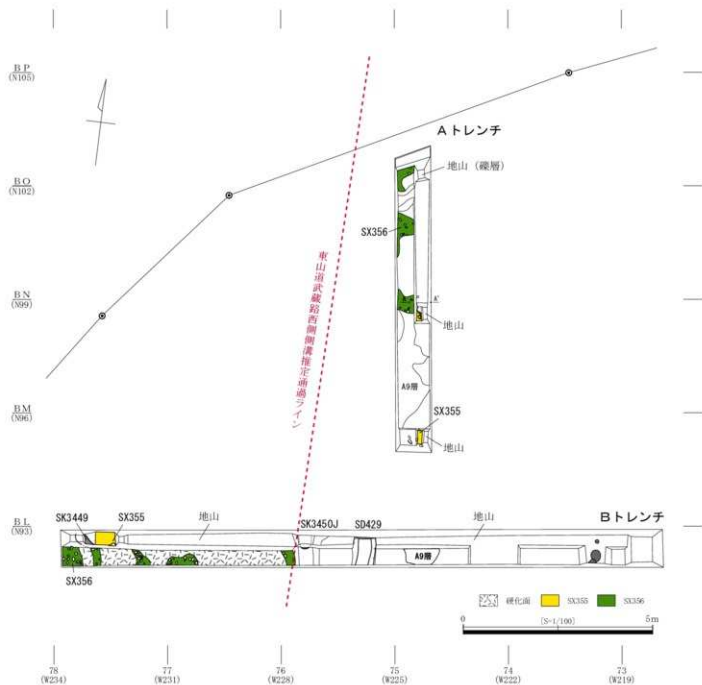
第 1 表 周辺の調査地区一覧(東山道武蔵路)

調査年	調査区	調査地	報告書	主な遺構
1991	MK359 次	西元町二丁目 2545-40	国分寺市教育委員会 2011「平成 21 年度国分寺市埋蔵文化財調査年報」	検出遺構なし
1978-80	MK79 次	西元町二丁目地内	国分寺市遺跡調査会 1990「武蔵国分寺跡発掘調査報告書 16」	伽藍、土坑、瓦組
1977	MK48 次	西元町二丁目 2545-10	国分寺市遺跡調査会・国分寺市教育委員会 1982「年報 1」	伽藍、溝、土坑
1982	MK148 次	西元町二丁目 2545-8	国分寺市遺跡調査会 2009「武蔵国分寺跡発掘調査報告書 34」	土坑
1984	MK210 次	西元町二丁目 2546	国分寺市遺跡調査会 2009「武蔵国分寺跡発掘調査報告書 34」	伽藍、土坑
1989	MK321 次	西元町二丁目 2548-85、2548-11	国分寺市遺跡調査会 2009「武蔵国分寺跡発掘調査報告書 34」	伽藍
1986	MK247 次	西元町二丁目 2548-74	国分寺市遺跡調査会 2009「武蔵国分寺跡発掘調査報告書 34」	検出遺構なし
1987	MK297 次	西元町二丁目 2548-5	国分寺市遺跡調査会 2009「武蔵国分寺跡発掘調査報告書 34」	検出遺構なし
1985	MK240 次	西元町二丁目 2548-68	未報告	遺構不明
2007	MK623 次	西元町二丁目 12-6	国分寺市教育委員会 2009「平成 19 年度国分寺市埋蔵文化財調査年報」	検出遺構なし
2002	MK558 次	西元町二丁目 2548-26	国分寺市教育委員会 2010「平成 20 年度国分寺市埋蔵文化財調査年報」	遺構不明
1984	MK222 次	西元町二丁目 2548-6	国分寺市教育委員会 2007「平成 16・17 年度国分寺市埋蔵文化財調査年報」	検出遺構なし
1983-84	MK37 次	西元町二丁目 8-16 墓地先	国分寺市遺跡調査会・国分寺市教育委員会 1998「武蔵国分寺跡発掘調査報告書 22」	溝・瓦片散存、礎石遺
2015	MK708 次	西元町一丁目 1658-1	本書	溝・瓦片散存、礎石遺、溝、土坑
1983-84	MK37 次	西元町二丁目 8-16 墓地先	国分寺市遺跡調査会・国分寺市教育委員会 1998「武蔵国分寺跡発掘調査報告書 22」	溝・瓦片散存、礎石遺
2014	MK699 次	西元町二丁目 1657-2	国分寺市教育委員会 2015「平成 25 年度国分寺市埋蔵文化財調査年報」	溝、礎石遺
1984	MK219 次	西元町二丁目 1670-1	未報告	溝、土坑、礎石遺
1977	MK49 次	西元町二丁目 1671	国分寺市遺跡調査会 2009「武蔵国分寺跡発掘調査報告書 34」	溝、土坑、礎石遺
1999	MK492 次	西元町二丁目 3・4 墓地	未報告	伽藍、溝、土坑
2015	MK705 次	西元町二丁目 4 区	国分寺市教育委員会 2016「平成 26 年度国分寺市埋蔵文化財調査年報」	伽藍
1991	MK357 次	西元町一丁目地内	国分寺市遺跡調査会・国分寺市教育委員会 1998「武蔵国分寺跡発掘調査報告書 22」	伽藍、溝、土坑
1982	MK135 次	西元町一丁目 2236-1	国分寺市遺跡調査会・国分寺市教育委員会 1989「武蔵国分寺跡発掘調査報告書 14」	伽藍、溝、土坑
1982	MK150 次	西元町一丁目 2231、2232-1	未報告	伽藍、溝、土坑
1979	MK91 次	西元町三丁目地内	国分寺市遺跡調査会・国分寺市教育委員会 1998「武蔵国分寺跡発掘調査報告書 22」	溝、土坑

第2章 検出された遺構と出土遺物

1. 歴史時代の遺構と遺物

当調査地区で検出された歴史時代の遺構は、溝1条 (SD429)、土坑1基 (SK3449)、道路1条 (SF1)、特殊遺構2基 (SX355・356)、小穴7基 (P-1～8) である。遺物は、各遺構や表土中より、須恵器、灰軸陶器、青磁、白磁、陶硯、瓦が出土している。



第3図 MKIV-704 調査区全体図

SD429 溝 (第3・5図)

SD429はBトレンチの中央付近で地表面から約1.1mの深さで検出された武蔵国分僧寺中軸線北に対して東へやや傾く南北方向の溝である。東山道武蔵路の推定通過ライン上にあり、周辺の調査地区から想定される西側側溝の推定ラインからは東に約1.5mの位置にあたる。形状は逆台形を呈し、上面幅は現況で50cm、底部幅は35cm、深さは20cmである。溝は、基本層序IV～V層に達する深さまで掘り込まれており、底部は水漬きによって酸化し、硬化している範囲が部分的にみられた。

覆土は2層の堆積が認められ、底部側の21層(Bトレンチ土層注記21層参照、以下B〇層)はロームブロックと黒色土が混在した土で底部ほどの硬化は見られない。その上層のB20層は酸化鉄を浸み状に含んだ層で下層より締まりが強くなる。東山道武蔵路の西側側溝としては小規模であり、また推定ライン上にあたらないこと、そして覆土や溝底部の状況からは水が流れていた痕跡が認められることから、斜面地からの流水や付近からしみ出す湧き水を誘導する排水機能をもった溝である可能性がある。遺物は出土しなかった。

SK3449 土坑 (第3・5図)

Bトレンチの西端、SX355特殊遺構の下層で検出された。規模は長軸40cm以上、短軸20cm以上、深さは確認面から20cmである。遺構は調査区外へ広がっているため、全容や性格はつかめなかった。覆土(B8層)は水の影響を大きく受けているものの古代に特徴的な黒褐色土である。SX355とほぼ同時期頃の土坑と考えられる。遺物は出土しなかった。

SF1 東山道武蔵路 (第3・4・5図)

Bトレンチの中央付近、東山道武蔵路の西側側溝推定通過ラインあたりから東側にかけて硬化面が検出され、位置的にも東山道武蔵路と想定される。硬化面は古代の遺構確認面であるIII b層で検出され、地山の上方(B24層)は、水漬きによって明赤褐色に変色し、2～4cmの厚さで硬化している。硬化面は、現況で東西幅約5mの範囲で確認できたが、道路の敷設時から5m幅に限定されていたかは定かではなく、さらに東へ続いていた可能性もある。硬化面は、東側から西側に向かって約20cmほど下がっており、断面形態は凹レンズ状を呈する(第5図)。これが東山道武蔵路の敷設時の路面もしくは、道路がやや掘り下げられた切り通し状の構造だとすればその構築面と考えられる。Aトレンチでも南端と中央サブトレンチのA8層に同一の硬化面が認められることから、少なくともBトレンチから北へ約5mまでは敷設時の路面が続くものと想定される。なお、Aトレンチでは、この硬化面の上に5～10cmの礫が部分的に敷かれている状況も確認された。また、硬化面が東端で途切れた先でIII a層の堆積が厚く見られることから、東側はかつてやや落ち込んでいた様子が窺えた。本調査地区のすぐ北東の位置(西元町二丁目7-21付近)には湧水源があったことから、そこから流れる水によって周辺は窪地のような低い部分が形成され、大雨などが降った際は大きな水たまりのようになっていたと考えられる。

一方、路面の西端は、この硬化した道路面を西へ延長するように構築されたSX355の起点付近、西側側溝推定ラインとほぼ同じと考えられる。その理由は、SX355は出土する遺物の年代から敷設時の構築ではないと考えられること、そして地山のあり方からSF1敷設時には西側側溝推定ラインあたりから西

方は登りの傾斜地となっていたと考えられることなどが挙げられる。

道路面については、BトレンチのSF1上層にあたるB19・23・27層が非常に硬い層であるため、道路遺構に関わるいわゆる硬化面の可能性がある。地山を凹レンズ状にやや掘り込んだ後に路面強化のために施された層とも捉えることができ、後にSX355が構築されるまでの間に使用された路面であった可能性も挙げられるが、Aトレンチ内との連続性が明確でなく断面観察のみの判断のため想定に留めたい。

遺物は、路面直上の層（B23層ほか）から縄文土器の破片が数点（遺物番号29～32、以下番号のみ）出土するのみで、古代の遺物は出土しなかった。

SX355 特殊遺構（第3・4・5図）

SX355はBトレンチの地表より約60cmの深さで検出された。礫敷きと硬化面からなる遺構(B6・17層)で、範囲は調査区の中央付近から西端まで東西約10mにおよび、さらに調査区外の西側へ延長している。礫敷層の厚さは約10～20cmで、主に2～10cmの礫、3mm大の小砂利、瓦片から構成される。礫敷層は全体的に水漬きにより酸化し、極めて硬くなっている。特にBトレンチの西側は酸化が激しく、調査時はハンマーとバールを用いて少しずつ砕いて掘り下げるような状況であった。西側の酸化状況からは、当時は常に水が流れ込んでいたものと看取される。礫敷き層上面は、ほぼ水平に構築されていることから、B17層とB6層からなるSX355が一連の遺構であることが認められる。B17層は、SF1の硬化面上層のB19・23層が形成された後に、B18層を充填し、その上に礫を敷いて造成されたものと考えられる。これに対し、B6層は礫敷き範囲をB17層よりさらに西へ延長するために、地山を水平に削った上に構築されている。旧地形については、昭和28年測量の地形図（第21図）から、Bトレンチの西側はかつて西から東へ緩傾斜する張り出した地形であったことが判明しており、この斜面をオープンカットすることで、幅10m以上の広範囲な空間を創出したものと考えられる。

ここで調査区内の地山の自然堆積状況について触れておくと、BトレンチではSF1のB24層の下では基本層序Ⅲb層、SD429付近はIV層、SK3450JではIV～V層、SX355のB6層の下では立川礫層の最上面（B8層）と、ほぼ同じレベルの標高で地山の様相が異なって検出されており、これは当該地点の特徴的な地形の発達を示していると考えられる。本調査地点は、地理的環境でも述べたとおり、現在の黒鐘公園を源とする野川の支谷（黒鐘谷）の低地部分にあたり、かつては周囲の武蔵野礫層からしみだす湧水が集まり、川となって流れていた場所である（第1図）。このような水の流がある範囲は、基本的に火山灰を主体とするローム層は洗い流されてしまっており堆積しないが、水量や流路の変化によって遅れて離水・乾燥化する場合がある。本調査地点で立川礫層の上にローム層がなく、黒色土・褐色土が堆積しているのは、このような離水時期の違いを示していると想定され、トレンチ内の同じレベルで立川礫層やⅢb層が検出されたのは、国分寺崖線下の特異な地形環境によるものと考えられる。

なお、Aトレンチ内ではSX355を明確に確認できなかったが、礫を含むA8層やA2層底部がSX355に相当する可能性がある。

SX355から出土したほとんどの遺物は水漬きによって酸化物が表面に付着していた。多くは小片であり、このうち須恵器（2）、男瓦（21）、女瓦（22・23・24・25）を図示した。

SX356 特殊遺構 (第3・4・5図)

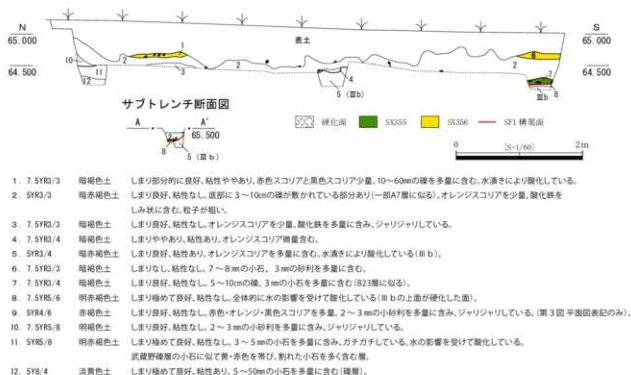
SX356はBトレンチの地表より約40cmの深度で検出された。SX355が構築された後、一定期間たった後に造り直したと考えられる礫敷きである。SX355と同じく礫敷きと硬化面(B2層)で構成され、範囲は調査区の西端付近から東へ約6mの幅で確認された。これより東側は耕作などによって削平されている可能性がある。礫敷層の厚さは約10～25cmである。全体的に砂粒と3～5mmの小礫を多量に含む非常に硬い層で、2～10cm大の礫や歴史時代の遺物を包含する。水漬きの状態は、西側が顕著で東側にいくにつれて酸化の赤味は弱まっていくが、層の底は全体に締まりが強くより硬質である。礫敷き層の上面はほぼ水平に保たれており、下層のB3層の凹凸を平らに調整して構築されている。

SX356はAトレンチでも検出され、北端はAトレンチの北端、国分寺崖線直下付近まで確認された。ただし、Bトレンチ内に比べると礫の密集度はそれほど高くなく、ややジャリジャリした硬質面とともに部分的に礫が検出される程度である。

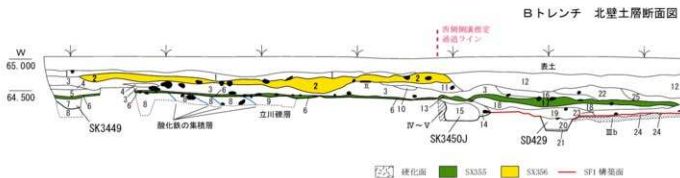
遺物は、歴史時代の土器や瓦が出土しており、須恵器(1・6)、灰釉陶器(14)、白磁(17)、鍔瓦(19)を図示した。

P-1～8小穴(第9・10図)

Bトレンチ内の東端では、複数小穴が検出された。P-1はⅢa層上面で検出された。平面形状は楕円形で、規模は長軸30cm、短軸28cm、深さ8cmである。底部から4cm大の礫が出土している。このほか直径15cmから20cmほどの小穴や、やや規模の大きい直径40cmほどの穴が検出されているが、いずれもプラン確認のみに留めた。多くはⅢa層上面で検出されていることから、比較的新しい時代のものと考えられる。遺物は小さい礫が覆土にみられるのみで、土器などは出土していない。



第4図 Aトレンチ 東壁土層断面図



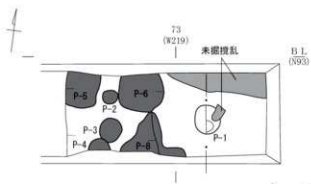
第6図 Bトレンチ土層断面合成写真(南から)



第7図 Bトレンチ西端 土・礫堆積状況(東から)



第8図 Bトレンチ B8層検出状況(南から)



1. 暗茶褐色土 粘性・しまりやあり、茶色土をブロック状に含み、やや硬質、赤色スコリアを微量含む(埋土)。
2. 暗茶色土 粘性・しまりなし、ボソボソしており、1層よりやや明るく土粒間にわずかなすき間がある。(当たり)

第9図 Bトレンチ東端 P-1～8平面図・断面図

P-1 断面図

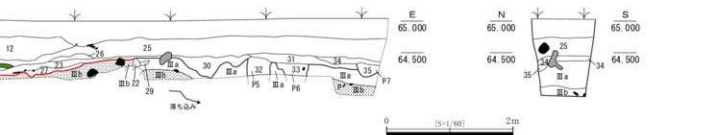


第10図 P-1～8検出状況(上が北)

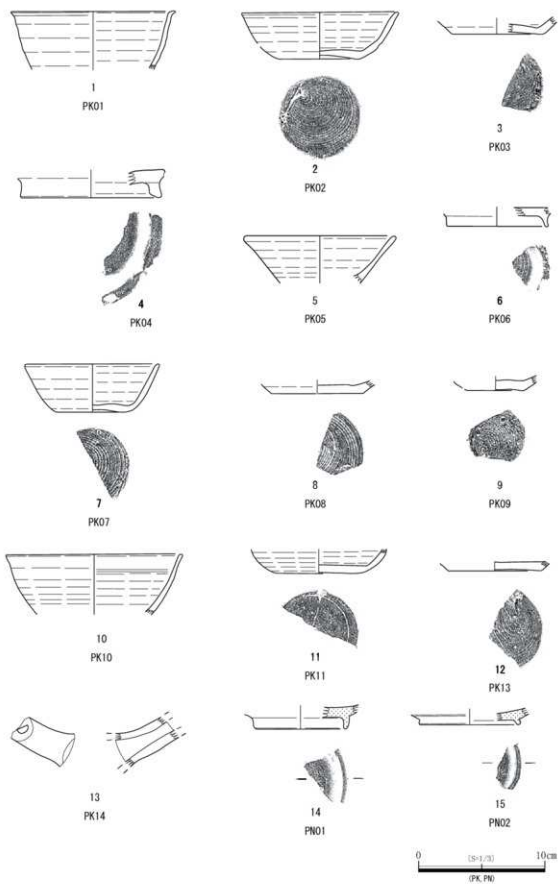


第11図 P-1土層断面(西から)

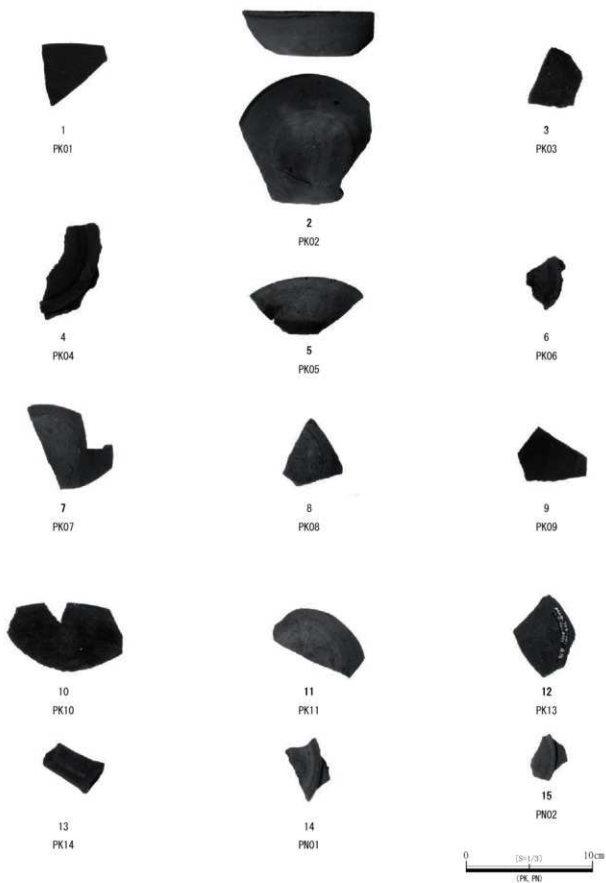
日トレンチ 東壁断面図



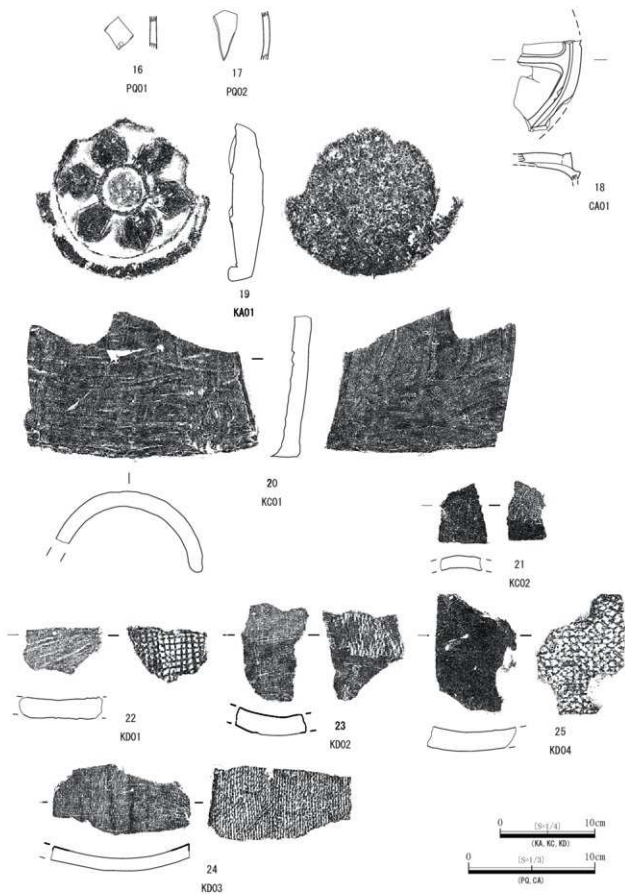
- | | | |
|---------------|--------|--|
| 1. 7. SYR3/3 | 暗褐色土 | 粘性なし、しまり良好、5 cmの礫を大量、部分的に砂粒をブロック状に含む、 |
| 2. 7. SYR6/1 | 褐色土 | 粘性なし、しまり極めて良好、全体的に砂粒が主体であり3～5mmの小石を少量含む、SK356構築層。 |
| 3. 7. SYR4/3 | 褐色土 | 粘性なし、しまりややあり、全体的に砂質で酸化鉄をしみ状に含む、上下の層に比べて小砂利が少ない、赤色スコリアを少量含む。 |
| 4. SYR5/8 | 明赤褐色土 | 粘性なし、しまり良好、3～5mmの小砂利が主体で、多量の砂が混じる(部分的に砂が混れてしまった層)。 |
| 5. SYR4/8 | 赤褐色土 | 粘性なし、しまり良好、3mmの小砂利を主体とし、3cm程度の礫を部分的に含む。 |
| 6. 7. SYR7/8 | 黄褐色土 | 粘性なし、しまり極めて良好、黄色の砂をしみ状に含む、2cmの小砂利を少量、4～10cmの礫を少量含む、底部は水の影響で非常に固く酸化している、下層は地山の上面が1～2cmの厚さで硬化している(SK355構築層)。 |
| 7. SYR2/2 | 黒褐色土 | 粘性あり、しまり良好、ブロック状にローム粒子(シルト)を少量含む(SK3449覆土)。 |
| 8. 10YR7/8 | 黄褐色土 | 粘性あり、しまり良好、シルト質の砂粒が崩壊したものをブロック状に大量含む、水の影響を受けて、酸化鉄がしみ状に全体に入る、3～10cmの礫を40%ほど含む(比川障壁)。 |
| 9. 7. SYR7/6 | 橙土 | 粘性なし、しまり極めて良好、黒色スコリア、赤色スコリアを少量、黄色い砂をブロック状に少量含む。 |
| 10. 10YR5/2 | 灰褐色土 | 粘性なし、しまり良好、3mmの小砂利を主体とし、やや砂質でジャリジャリしている(4に似る)。 |
| 11. 10YR4/6 | 褐色土 | 粘性なし、しまり良好、含有物は少なく、赤色スコリア、黒色スコリアを少量含む。 |
| 12. 10YR3/3 | 暗褐色土 | 粘性ややあり、しまりややあり、シルトの粒子及びオレンジスコリアと赤色スコリアをやや多量、3cm大の礫を上層部に少量含む。 |
| 13. 7. SYR5/1 | 褐色土 | 粘性ややあり、しまりややあり、3～5cm大の礫を少量含む(SK355構築層)。 |
| 14. 7. SYR5/6 | 明褐色土 | 粘性なし、しまり極めて良好、オレンジスコリアを少量、シルト粒子を少量含む(SK3449覆土の上層、SK355の下層)。 |
| 15. 7. SYR5/6 | 明褐色土 | 粘性ややあり、しまりややあり、赤色スコリアを30%含む(SK3450覆土)。 |
| 16. SYR4/6 | 赤褐色土 | 粘性あり、しまり良好、水の影響を受けて全体に酸化鉄を含む、シルトを少量含む。 |
| 17. 7. SYR5/2 | 褐色土 | 粘性なし、しまり極めて良好、ガチガチしており、2cm大の小礫と5cm大の小石を主体とする、部分的に5～10cmの礫を含む(SK355構築層)。 |
| 18. 7. SYR4/6 | 褐色土 | 粘性なし、しまり極めて良好、シルト粒子を少量、酸化鉄を全体にしみ状に含む(SK355を構築する際に埋めた層)。 |
| 19. SYR3/4 | 明赤褐色土 | 粘性なし、しまり極めて良好、2～5mm大の小砂利を大量、黒色スコリアを微量、シルト粒子を少量含む、ガチガチしている(硬化層)。 |
| 20. SYR2/2 | 黒褐色土 | 粘性なし、しまり良好、シルト粒子、赤色スコリアを多量、2cm大の礫を少量、酸化鉄をしみ状に含む(SD429覆土)、酸化状況から水の影響が多(認められ、溝の中の水が流れていった痕跡がある)。 |
| 21. SYR4/6 | 赤褐色土 | 粘性なし、しまりややあり、ロームブロックと黒色の土の互層(低部に部分的に酸化鉄の集ちがみられる、底部直上に10cm大の礫を1個含む)。 |
| 22. SYR4/3 | いぶき褐色土 | 粘性ややあり、しまりややあり、部分的にしまりが強く、2～5cm大の礫をごく少量、赤色スコリア、オレンジスコリアを少量含む。 |
| 23. SYR5/6 | 明赤褐色土 | 粘性なし、しまり極めて良好、赤色スコリア、シルト粒子、酸化鉄粒子を少量含む、部分的に3～5cm大の礫を少量含む(硬化層)。 |
| 24. 7. SYR5/1 | 明赤褐色土 | 粘性なし、しまり極めて良好、全体に水の影響を受け酸化している(Ⅱbの上面が硬化した面で、SF1の構築層)。 |
| 25. 7. SYR3/3 | 暗褐色土 | 粘性ややあり、しまり良好、赤色スコリア、シルト粒子を少量含む、ややボソボソしている。 |
| 26. 7. SYR4/6 | 褐色土 | 粘性なし、しまり極めて良好、赤色スコリア、オレンジスコリア、シルト粒子を少量含む(硬化層)。 |
| 27. 7. SYR3/3 | 暗褐色土 | 粘性なし、しまり極めて良好、赤色スコリア、を少量、1cm大の小石を上方付近に少量含む(硬化層)。 |
| 28. 7. SYR4/3 | 褐色土 | 粘性なし、しまり良好、オレンジスコリアを上方に、5～20mm大の礫を下方に含む、炭化物を極微量含む。 |
| 29. 7. SYR7/8 | 黄褐色土 | 粘性ややあり、しまり良好、オレンジスコリアを下方に少量含む。 |
| 30. 7. SYR3/4 | 暗褐色土 | 粘性ややあり、しまりややあり、シルト粒子が部分的に密集する、オレンジスコリア、赤色スコリアを少量、炭化物を極微量含む。 |
| 31. 7. SYR5/6 | 明褐色土 | 粘性なし、しまりなし、ボソボソしている、オレンジスコリアを微量、3mmの小石を微量含む、部分的にしまりがある。 |
| 32. 7. SYR4/4 | 褐色土 | 粘性ややあり、しまりややあり、赤色スコリア、シルト粒子を微量、2cm大の小石を微量含む、部分的にボソボソしている(IP-5覆土)。 |
| 33. 7. SYR4/3 | 褐色土 | 粘性なし、しまりなし、ボソボソしている、シルト粒子を微量、下方に炭化物を微量含む(IP-6覆土)。 |
| 34. 7. SYR5/6 | 明褐色土 | 粘性ややあり、しまりややあり、部分的にしまり、オレンジスコリア、赤色スコリア、シルト粒子を少量、下方に1cm大の小石をブロック状に含む。 |
| 35. 7. SYR4/4 | 褐色土 | 粘性ややあり、しまりややあり、下方にロームブロックを多量、上方にシルト粒子、炭化物、4mm大の礫をやや多量含む、ややボソボソしている(IP-7覆土)。 |



第 12 図 出土物実測図 (歴史時代) 1



第 13 図 出土遺物写真（歴史時代） 1



第14圖 出土遺物実測図（歴史時代）2



第 15 図 出土遺物写真（歴史時代）2

第2表 歴史時代遺物観察表

MKIV-704			歴史時代 土 器											
番号 遺物番号	種別 器種	出土 位置	口径 最大径 (cm)	器形の特徴	成・整形の特徴	残量	備考							
1 PK01	須恵器 坏	SX356	(13.0) (4.6)	体部は緩やかに内湾し、口縁部端は外反する。	口ロ調整。	口縁部 ～体部 小片	灰色。堅い。焼成普通。微・小砂粒少量、白色針状物質多量。							
2 PK02	須恵器 坏	B3層	(12.4) (3.7)	体部下半は湾曲気味に立ち上がり、口縁部は外反する。	口ロ調整の後、底部は回転糸切りをし、無調整。	口縁部 ～底部 2/3	灰白色。堅い。焼成普通。微砂粒少量、白色針状物質多量。南比内Ⅷ期(9世紀中葉)。							
3 PK03	須恵器 坏	SX355	(1.4)	底部中央の器内厚い。底部下半は直線気味に立ち上がる。	口ロ調整の後、底部は回転糸切りをし、無調整。	体部 ～底部 小片	灰色。堅い。焼成普通。微砂粒やや多量、2～3mmの角礫微量。							
4 PK04	須恵器 長頸瓶	B18層	(11.0)	高台は角高台を呈する。	口ロ調整の後、胴部外面下半・底部外周回転ヘラズリをし、高台付。	底部 小片	灰色。堅い。焼成普通。微砂粒少量、2～3mmの角礫微量。水漬きによる酸化物付着。							
5 PK05	須恵器 坏	Ⅷa層	(12.0) (3.8)	体部は直線的に立ち上がり、口縁部はやや外反する。	口ロ調整。	口縁部 ～体部 1/6	口縁部は直線的に立ち上がり、口縁部はやや多量、小砂粒少量、2～3mmの角礫少量。							
6 PK06	須恵器 坏	SX356	(18.0)	外反する低い高台を有する。	口ロ調整の後、底部は回転糸切りをし、無調整。重ね焼き。	底部 1/5	灰色。堅い。焼成普通。微砂粒少量。水漬きによる酸化物付着。							
7 PK07	須恵器 埴	表土	(10.6) 3.8 (5.8)	底部から口縁部にかけてわずかに内湾して立ち上がる。	口ロ調整の後、底部は回転糸切りをし、無調整。	口縁部 ～底部 1/7	灰オリーブ色。堅い。焼成普通。微・小砂粒やや多量、2～3mmの角礫微量。水漬きによる酸化物付着。							
8 PK08	須恵器 坏	表土	(1.0)	底部はやや内厚。	口ロ調整の後、底部は回転糸切りをし、外周をヘラズリ。	底部 1/4	灰色。堅い。焼成普通。微砂粒少量、2～3mmの角礫微量、白色針状物質多量。							
9 PK09	須恵器 坏	表土	(7.2)	底部中央の器内厚や厚い。	口ロ調整の後、底部は回転糸切りをし、無調整。	底部 2/3	灰色。堅い。焼成普通。微砂粒あつや多量。							
10 PK10	須恵器 坏	表土	(14.0) (4.8)	体部は内湾して立ち上がり、口縁部はやや外反する。	口ロ調整。	口縁部 ～体部 1/5	内面にぶい艶色。外面：黄灰色。堅い。焼成普通。微砂粒少量、2mm大の角礫微量。							
11 PK11	須恵器 坏	A2層	(11.9) (6.4)	底部は体部に比べてやや内厚。	口ロ調整の後、底部は回転糸切りをし、底部外周・体部下端回転ヘラズリ。底部の一部に煤。	体部下 ～底部 1/3	灰白色。堅い。焼成普通。微砂粒やや多量、石炭微量、白色針状物質多量。							
12 PK12	須恵器 坏	表土	(6.7)	底部内面はほぼ平坦。	口ロ調整の後、底部は回転糸切りをし、無調整。底部外面に並走する4条の浅いヘラ書き痕あり。底部内面は広範囲で磨滅。	底部 1/3	灰色。堅い。焼成普通。微砂粒多量、2～3mmの角礫微量。							
13 PK14	須恵器 浄瓶	表土	現存長は備考に記載	注口は先端にかけて窄まる。	注口部外面ナゲ。外面の一部にオリーブ灰色の障灰釉。	注口部 3/4	灰色。堅い。焼成普通。微砂粒少量、白色針状物質多量。最大長(4.7)、最大幅(2.9)、外径2.9～2.2、内径1.8～0.9。							
14 PK01	灰輪陶器 皿	SX356	(1.9)	内側がやや内湾する高い輪高台。	口ロ調整の後、底部は回転糸切りをし、無調整。高台付根ナゲ。	底部 小片	灰白色。堅い。焼成普通。微砂粒少量。							
15 PK02	灰輪陶器 皿	表土	(1.3) (0.6)	低い輪高台。	口ロ調整の後、体部下端から底部外面回転ヘラズリ。見込みにオリーブ黄色の釉。	底部 小片	灰白色。堅い。焼成普通。微砂粒微量。							
16 PK01	青磁 碗	表土	(2.6)	体部はやや内湾する。	淡灰緑色の釉。貫入普通。釉層薄い。体部外面に劃花文。	体部 小片	龍泉窯系。灰白色。硬質。焼成良好。白色粒微量。							
17 PK02	白磁 碗	SX356	(3.9)	体部は緩やかに湾曲する。	無色透明の釉。貫入なし。	体部 小片	定窯系。白色。硬質。焼成良好。精良緻密。							
MKIV-704			歴史時代 陶 磁											
番号 遺物番号	種別 器種	出土 位置	最大長 最大幅 最大厚 (cm)	特徴	成・整形の特徴	残量	備考							
18 CM01	円面碗	表土	(7.3) (5.4) (2.1) (18.0)	碗面は若干の傾斜によって肩部と腹部の区分をしている。碗面部の縁から腹部中央へと続く台形の内縁(突帯)があるため2面碗の可能性あり。透かし1カ所確認(想定最大20)。腹部外端に使用痕(磨痕)あり。	内外面口ロナゲ。	碗面部 1/8	須恵質。灰色。堅い。焼成普通。微砂粒やや多量、石英微量、2～4mm角礫微量。白色針状物質少量。							
MKIV-704			歴史時代 鍔 瓦											
番号 遺物番号	出土 位置	直径	内区				外区			全長	備考			
			中房形 形数	透子 数	弁区注 弁幅	弁数	幅	内縁 幅	外縁 幅			外縁 高		
19 KM01	SX356	(16.6)	5.5	—	15.1 3.5	6	1.8	0.5	—	1.5	1.0	—	(3.7)	厚弁六葉。暗赤褐色。堅い。焼成普通。微・小砂粒多量、2～3mmの角礫少量。瓦当裏面はナゲ調整。全体は磨滅。

MKIV-704		歴史時代 男 瓦								
番号 遺物番号	出土 位置	狭端 広端 全長 (cm)	厚さ (cm)	成・形状の特徴				備考		
				素材	凹面		凸面			
					布目	特徴	叩き		特徴	端面
				特徴						
20 KD01	表土	(15.7) (16.0)	1.8	—	—	側端縁面取り。 広端縁ナデ。 全体に布目を消すナデ。	—	側端縁面取り。 全体ヨコナデ。	広・側端面調整。	無段。灰色。堅い。焼成普通。微砂粒多量。2～7mmの角礫微量。白色針状物質やや多量。
21 KD02	SX355	(3.5) (6.4)	1.3	—	21×22	広端縁ナデ。	—	ナデ。	広端面ヘラケズリ。	灰色。堅い。焼成普通。微砂粒やや多量。石英微塵。水漬きによる酸化物付着。

MKIV-704		歴史時代 女 瓦								
番号 遺物番号	出土 位置	狭端 広端 全長 (cm)	厚さ (cm)	成・形状の特徴				備考		
				素材	凹面		凸面			
					布目	特徴	叩き		特徴	端面
				特徴						
22 KD01	SX355 上方	(8.5) (5.9)	2.2	—	14×17	狭端縁ナデ。	正格子	正格子叩き。	狭端面ヘラケズリ。	暗灰色。堅い。焼成普通。微砂粒多量。2～4mmの角礫微量。白色針状物質多量。全体に磨滅。水漬きによる酸化物付着。
23 KD02	SX355 下方	(2.8) (10.6)	3.4	—	26×26	—	調目	調目叩きの後、一部ヘラケズリ。	広端面ヘラケズリ。	灰色。堅い。焼成普通。微砂粒やや多量。2～6mmの角礫微量。水漬きによる酸化物付着。
24 KD03	SX355 上方	(7.5)	1.6	—	24×30	側端縁面取り。	調目 L10	調目叩き。	側端面ヘラケズリ。	灰色。堅い。焼成普通。微砂粒少量。2～11mmの角礫微量。水漬きによる酸化物付着。
25 KD04	SX355 上方	(3.2) (13.6)	2.3	—	—	ナデ。	斜格子	斜格子叩きの後、一部に粗いナデ。	—	淡褐色。やや硬い。焼成やや不良。微砂粒微量。2～3mmの角礫微量。白色針状物質多量。

2. 縄文時代の遺構と遺物

当調査地区で検出された縄文時代の遺構は、土坑1基 (SK3450J)、性格不明遺構1基 (SX354J) である。遺物は、遺構や包合層、表土中より、縄文時代中期前半から後期の土器片が出土している。

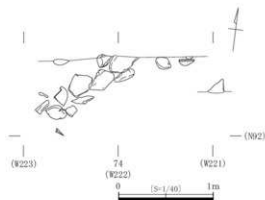
SK3450J 土坑 (第3・5図)

BトレンチのSD429より西へ約1.5mの場所で検出された。確認面での規模は長軸30cm以上、短軸35cm以上、深さは約20cmである。土坑の上方はB14層によって硬く蓋をされるような状況で検出されておりSF1もしくはSX355の構築時に上部が削平された可能性がある。遺構は調査区より北へ広がっており、全容や性格は不詳である。覆土からは、縄文土器の破片や小石が出土したが、図示しうものはない。

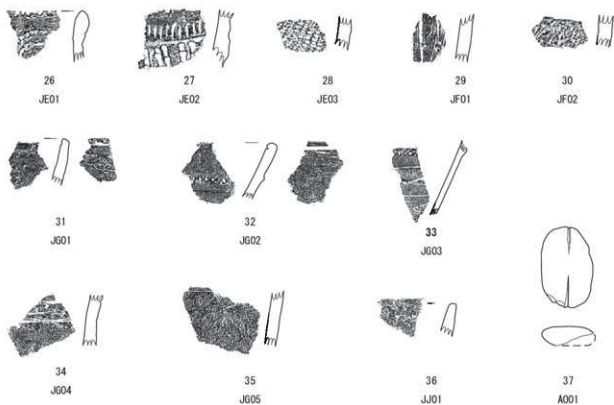
SX354J 性格不明遺構 (第16図)

SK3450Jから東へ約4mの位置で、SF1の推定路面より下層のIIIb層から検出された。長軸が10～20cm大の河原石を配置した遺構で、石は30～35cmの幅で帯状に組まれ、南西から北東方向に軸をとっている。石組は調査範囲より北東方向にさらに延長すると想定される。

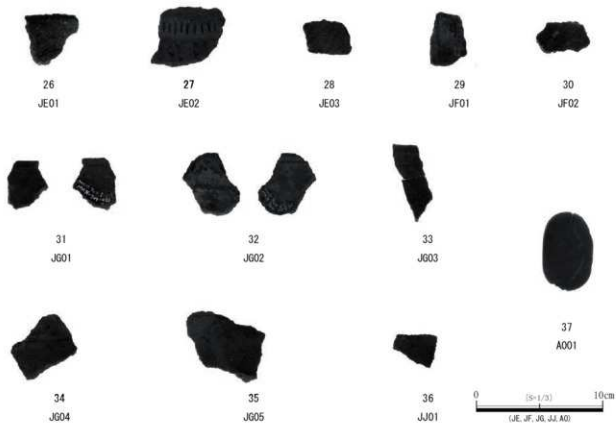
石の隙間や付近からは、縄文土器の破片が出土しているが図示しうものはない。



第16図 SX354J 平面図



第 17 図 出土遺物実測図 (縄文時代)



第 18 図 出土遺物写真 (縄文時代)

第3表 縄文時代遺物観察表

MKIV-704		縄文時代 土 器							
番号 遺物番号	種別 器種	出土 位置	口径 器高 底径 (cm)	器形の特徴	成・整形の特徴	備考			
26 JE01	深鉢	Ⅲ a 層	— (4.0)	やや外傾する口縁部。	口唇上に刻み、Rの縄文を地文とし、押し引きを二列施す。内面に稜を有する。内面は丁寧なヨコナデ。	何玉台1b層。内外面ともに黒色。焼成普通。微粒多量。金雲母多量。粘土やや粗い。			
27 JE02	深鉢	Ⅲ a 層	— (4.6)	頸部片。	横位の幅状の隆帯上に刻み。区画内に押し引きを施す。	辨別I期。内外面ともに暗褐色。焼成やや良好。微粒多量。粘土やや緻密。			
28 JE03	深鉢	Ⅲ b 層	— (2.8)	胴部。 小片のため全体の器形は不明。	R1縄文を地文とする。	中期前半か？。外面：暗褐色。内面：黒色。焼成やや不良。微粒少。粘土やや緻密。			
29 JE01	深鉢	B23 層	— (3.8)	胴部。 小片のため全体の器形は不明。	縦位の沈線と斜位の櫛歯状条線を施す。内面は丁寧なヨコナデ。	中期後半（曾利IV）。外面：暗褐色。内面：黒色。焼成やや良好。微粒少。粘土やや緻密。			
30 JE02	深鉢	B23 層	— (2.6)	小片のため全体の器形は不明。	横位の無節L縄文を地文とする。	中期後半か？。外面：暗褐色。内面：暗黄色。焼成普通。微粒やや多量。2mm大の角礫やや多量。粘土やや緻密。			
31 JE01	深鉢	B19 層	— (3.7)	口縁はほぼ垂直に立ち上がる。	口唇部下に細い横位の沈線を施す。胴部にかけて菱形の格子状を細い沈線で施す。内面の口唇部下に沈線を施す。	堀之内目式。内外面ともに暗褐色。焼成普通。微粒少。2mm大の角礫多量。粘土やや緻密。			
32 JE02	深鉢	B19 層	— (4.5)	ほぼ垂直に立ち上がる口縁片。	外面は丁寧なヨコナデの後、幅状の貼付隆帯を付し、櫛状隆帯を施す。内面は口唇部下に沈線を施す。丁寧なヨコナデ。	堀之内目式。外面：黒色。内面：暗褐色。焼成普通。微粒やや多量。2～3mmの角礫やや多量。粘土やや緻密。			
33 JE03	深鉢	B25 層	— (5.9)	頸部～胴部片。	横位の筋状沈線。胴部にかけて沈線による幾何学文を施す。内面は丁寧なヨコナデ。器内は極めて薄い厚さ。	堀之内目式。外面：黒色。内面：暗黄色。焼成普通。微粒少。褐色スコリア少量。粘土やや緻密。			
34 JE04	深鉢	Ⅲ a 層	— (4.0)	頸部片。	横位の幅状の沈線を三条施す。	堀之内か？。外面：赤褐色。内面：黒色。焼成やや不良。微粒少。褐色スコリア少量。粘土やや緻密。			
35 JE05	深鉢	Ⅲ a 層	— (4.5)	胴部片。	交差する細い条線を施す。内面は比較的丁寧なヨコナデ。	堀之内か？。内外面ともに暗褐色。焼成やや良好。微粒多量。2mm大の角礫少量。粘土やや粗い。			
36 JE01	深鉢	Ⅲ a 層	— (2.6)	口縁部。小型土器か？。	無文。	中期か？。内外面ともに暗黄色。焼成不良。微粒少。粘土緻密。			
MKIV-704		縄文時代 石 器							
番号 遺物番号	種別 形態	出土位置	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	遺存 状態	石材	備考
37 A001	石鏃	Ⅲ b 層	6.3	4.1	1.5	49.2	2/3	緻密黒色 安山岩	片面剥離。

第3章 結 語

当該地区における歴史時代の遺構は、東山道武蔵路の推定ラインで検出された道路1条(SF1)、そして礫敷きと硬化面から構成される特殊遺構2基(SX355・356)、道路に関連する可能性がある溝1条(SD429)、土坑1基(SK3449)、そのほか小穴8基(P-1～8)であった。

東山道武蔵路は、両側側溝を伴わない構造で、道路中央が凹レンズ状にやや窪み、その上に路面もしくは構築面と考えられる硬化面が形成されている状況が想定された。礫が敷かれた特殊遺構は2層あり、1層目のSX355は平坦な空間を確保するために地山をオープンカット状に削平し、その上に礫や瓦を敷いて水が滲みだす地盤に対応している様子が窺えた。2層目のSX356はSX355より上の面で検出された礫敷き層で、SX355が造られてしばらくたった後に改めて補修・整備されたものと看取された。

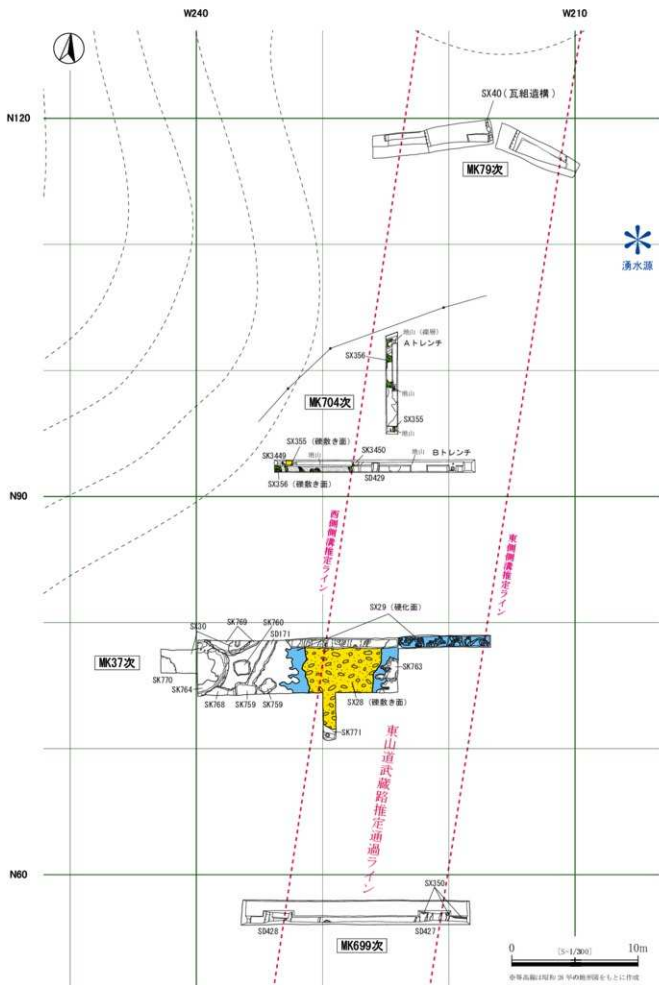
縄文時代の遺構は、土坑1基(SK3450J)、河原石が配された性格不明遺構1基(SX354J)であり、ともに立川段丘面で検出されたことから、国分寺崖線下での活動を知るうえで貴重な資料となった。

縄文時代の遺物は、中期前半から後期の土器片、石錘が出土しており、一部は台地上の武蔵野段丘面から流れ込んだものと想定される。

以下、今回の調査で得られた知見から当該地区の東山道武蔵路や特殊遺構の時期や地形的な特徴についてまとめる。

各遺構の年代 特殊遺構の構築年代については、礫を敷く際に不要となった瓦や土器片を投げ込んだと思われることから、出土した遺物からおおよその時期が想定できた。SX355の礫と同じ層で出土した遺物は奈良時代以降のものであり、この地で古代の人々が生活しはじめるのは、天平13年(741)に国分寺建立の詔が発布され、当該地に武蔵国分寺が造営されてからのため、上限は8世紀中頃と考えることができる。SX355から出土した瓦片や土器片は小さいものが多く、具体的な年代を特定できるものはなかったが、上層のB3層からは、南比金IV期に該当する須恵器坏(遺物番号2)が出土していることから、下層にあたるSX355は概ね9世紀前半が下限と想定される。同様にSX356からは、八坂前窯跡で生産された単弁六葉蓮華文甕瓦が出土していることから、七重塔の再建(承和12年(845)上限)以降の武蔵国分寺の再建期、概ね9世紀中葉から後半頃と考えられる。ただし、いずれの遺構年代も少ない遺物からの想定であるため、今後も追加の検証が必要となろう。なお、東山道武蔵路に伴う歴史時代の遺物は皆無で、硬化面上層から縄文土器の破片が出土するのみであったため、時期を推定することはできなかった。しかし、上層にあたるSX355の構築年代から、少なくとも武蔵国分寺の創建以前であることは確実である。以上のことから、東山道武蔵路は、8世紀中頃以前、SX355は8世紀中頃～9世紀前半、SX356は9世紀中頃～後半という年代が想定される。

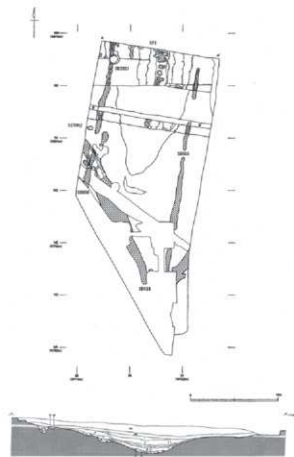
旧地形の状況と東山道武蔵路の推定ライン 高低差が12mに及ぶ国分寺崖線に対して東山道武蔵路がどのように通過していたのかを検討する手がかりとしては、現在の西国分寺駅の東側、武蔵野段丘面から北の恋ヶ窪谷の低地に向かう斜面地で実施された調査(MK503次、国分寺市遺跡調査会2000ほか)がある。調査では道路の構造が両側に側溝を伴う12mの道路から徐々に路面の中央が窪み、や



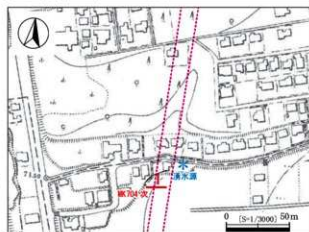
第19図 周辺の調査区と東山道武蔵路の推定通過ライン

がて深い切り通し状に開削されていく状況が明らかとなっている。調査範囲での傾斜角は10度程度となっており、緩やかな傾斜とするために人為的に台地を掘り込んでいる状況が確認されている（第20図）。当調査地区の場合は、斜面地の現状が宅地のため旧地形の想定が難しいが、周辺で近年実施されたMK699・704次の調査成果をもとに微調整した推定通過ライン（第19図）から改めて検討してみたい。

東山道武蔵路の推定通過ラインを東京都建設局発行の昭和28年及び35年測量地形図にてあてはめてみると、かつてあった開析谷の谷頭付近を通過していることが読み取れる（第21図）。しかし、崖下から崖上までの推定ルートをあくまで直線と想定した場合、谷の中央を通過せず、やや西寄りの路線となる。あえて谷の中央を通過させなかったとすれば、考えられる理由は、①谷底の中央は雨水の流れ込みが激しいため、やや西にずらしたルートをとった、②開析谷の降り口には湧水源があるため、直線で道路を通過させるためにこれを回避するようにやや西寄りにした等が想定される。今後の調査によって、新たな情報が得られるかもしれないが、現状ではMK503次調査区のように台地を大規模に削平する状況とは異なり、開析谷という自然の地形を活かしつつ、木などの自然環境や道路の直進性を考慮したルート設定であったと想定される。なお、昭和28年地形図をもとに谷頭から立川段丘までの距離を約90m、国分寺崖線の比高差を12mと仮定すると、東山道武蔵路の傾斜角は約7.6度となり、MK503次調査地点の傾斜と比べると緩やかな勾配になっている。



第20図 武蔵国分寺跡第503次調査
東山道武蔵路平面図・断面図



第21図 昭和28年(上)と昭和35年(下)測量
地形図の開析谷と東山道武蔵路推定通過ライン

僧尼寺中間地点の東山道武蔵路 昭和28年測量の地形図によれば、Bトレンチの西側はかつて東側に張り出す地形であったことがわかり、本調査においても地山の自然堆積の状況から調査区より西側は傾斜地であったことが想定された。SX355 礫敷き面はこれらの斜面の一部を平坦に削平して構築されているが、位置的には東山道武蔵路の推定通過ラインより西側へ広がっており、また東山道武蔵路が敷設された時期とSX355が構築された時期も異なっているため、両者は性格が異なる遺構であると考えられる。

武蔵国分寺の僧寺と尼寺の間の空間（第2図参照）は、東山道武蔵路を通して運搬された物資や人が二寺へ向かう分岐地点でもあり、修理院などの付属施設もあるため東西の往来も多く、道路の補修や整備が頻繁に行われていたと想定されている。また、MK37次調査区で検出されたSX28・29のように道路幅を越えて整備された礫敷き面や、MK699次調査やMK49次調査では道路外に及び硬質面が確認されていることから、東山道武蔵路が官道としての役割を終える宝亀2年（771）以降、僧尼寺中間地域の道路は、幅約12mの直線道路という規格から外れて、周囲は広い公共空間へと変化し、南北交通路の機能を維持しつつも寺院地に組み込まれていったとも考えられている（増井2015・2016）。

本調査地区で検出された礫敷き面の範囲も推定される道路幅を越えており、また周辺の調査成果を考慮すると、武蔵国分寺の寺院地を管理する上で、治水を含めた湧水源付近の水場の整備や、平面空間の拡大等を目的としたものであったと想定しておきたい。

なお、MK37次で検出されたSX28 礫敷き面と、本調査地区のSX355は、ともに標高64.400～64.500m付近で検出されており、また礫敷き面の下に硬化面が構築されていることも類似していることから、同じ遺構である可能性が挙げられる。しかし、礫敷き面が両調査区の間を連続しているかは不明で、これはMK37次とMK699次の調査区間についても同様であり、さらなる検証も含め今後も周辺での調査を進めていくことが肝要である。

最後になりましたが、発掘調査を快く御承諾いただき、多大な御理解・御協力を賜りました地権者様や、報告書刊行までの間に御教示いただきました関係者の皆様には、改めて感謝の意を表します。

（坂詰秀一・増井有真）

〔参考・引用文献〕

- 福田信夫 1997「武蔵国分寺と古代道路」『古代文化』49
国分寺市遺跡調査会 2000『武蔵国分寺跡発掘調査概報29』
（財）古代学協会・古代学研究所東京支所 2000『道路遺構等確認調査報告書』
福田信夫 2000「武蔵国分二寺跡周辺」『道路遺構等確認調査報告』東京都教育委員会
国分寺市遺跡調査会 2008『東山道武蔵路発掘調査概報1』
国分寺市教育委員会 2012『国指定史跡武蔵国分寺跡 附東山道武蔵路跡保存管理計画（第2次）』
国分寺市教育委員会 2013『東山道武蔵路跡保存整備事業報告書』
増井有真 2015「武蔵国分寺周辺の東山道武蔵路」『東山道武蔵路調査の最前線』シンポジウム資料集
増井有真 2016「東山道武蔵路と武蔵国分寺」『考古学の諸相 IV』坂詰秀一先生追悼記念論文集
※上記以外の報告書については、「第1表 周辺の調査地区一覧（東山道武蔵路）」（P11）を参照

図版1 A・Bトレンチ



Aトレンチ全景 (南から)



Aトレンチ全景 (北から)



Aトレンチ南端 SX355・SF1 硬化面検出状況
(西から)



Aサブトレンチ SX355・SF1 硬化面検出状況
(南から)



Aサブトレンチ SX356 (上段)・SX355 (中段)・
SF1 硬化面検出状況 (東から)



Bトレンチ西端 SX356 (左上段)・SX355 (右
下段) 検出状況 (東から)

図版2 Bトレンチ



Bトレンチ全景 (東から)



Bトレンチ全景 (西から)



Bトレンチ SX356 検出状況全景
(西から)



Bトレンチ SD429 完掘状況 (上が南)



Bトレンチ SX356 再建期鏡瓦検出状況
(上が南)



Bトレンチ SX354J 検出状況 (上が南)



Bトレンチ SK3450J 土層断面 (南から)

報告書抄録

ふりがな	東山道武蔵路発掘調査概報Ⅱ
書名	とうさんどうむさしみちはつくつちょうさがいほうⅡ
副書名	保存管理計画に基づく学術調査
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	坂詰秀一 増井有真
編集機関	国分寺市教育委員会・国分寺市遺跡調査会（会長：坂詰秀一）
所在地	〒185-0023 東京都国分寺西元町1-13-10 武蔵国分寺跡資料館内 TEL. 042-300-0073
発行年月日	2016年3月31日
規格／部数	A4版横組1段 46文字×34行 32頁／300部
資料の保存 問い合わせ先	国分寺市教育委員会 教育部 ふるさと文化財課 〒185-0023 東京都国分寺西元町1-13-10 武蔵国分寺跡資料館内 TEL. 042-300-0073 FAX 042-300-0091 E-mail bunkazai@city.kokubunji.tokyo.jp

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
武蔵国分寺跡 第704次調査	東京都 国分寺市 西元町	13-214	10・19	35°	139°	20150127 ～ 20150312	合計 21.0	学術調査
				41′	28″			

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
武蔵国分寺跡	集落跡 寺院跡 道路跡	奈良・平安 時代	溝1条 土埃1基 道路1条 特殊遺構2基 小穴8基	須恵器、灰釉陶器、青 磁、白磁、陶甎、瓦	硬化面を伴う東山道武蔵路 を検出。その上層では、2 層の礎敷き面を確認。
		縄文時代	土埃1基 性格不明遺構1基	縄文土器、石鏃	

要約	平成27年度に国分寺崖線下で実施した東山道武蔵路の位置や構造を確認するための学術調査の成果を掲載した報告書。硬化面を伴う道路と、幅10mにおよぶ礎敷き面が検出された。
----	---

東山道武蔵路発掘調査概報Ⅱ

— 保存管理計画に基づく学術調査 —

発行日 平成28(2016)年3月31日
 編集 国分寺市教育委員会
 国分寺市遺跡調査会
 発行 国分寺市教育委員会
 〒185-0023 東京都国分寺市西元町1-13-10
 (武蔵国分寺跡資料館内 ふるさと文化財課)
 印刷 (株)プリントショップ国分寺

©Kokubunji City Board of Education 2016. Printed in Japan

マットコート 菊版 76.5kg

令和3年(2021)8月31日 デジタル版作成